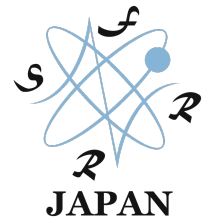


SFRR Japan NEWSLETTER

June, 2024



TOP NEWS

◆◆◆ 2024年 新体制スタート ◆◆◆

2024年5月18日開催の代議員総会を持って、役員(理事・監事)・代議員全員が任期満了を迎え、先の選挙で選出された役員・代議員にて、新体制がスタートしました。

理事長 : 赤池孝章
副理事長: 伊東 健、内藤裕二、西田基宏、
本橋ほづみ、李 昌一 (以上5名)
監事・会計幹事・庶務幹事は継続
(理事27名、代議員85名、監事2名)



いずれも任期は、2024年度代議員総会終了後から2026年度代議員総会終了までとなります。詳細は、学会HPを参照ください。
<http://sfrj.umin.jp/ellection/>

2期4年の任期を務められた内藤裕二先生が理事長を退任され、後任には理事会の決議で選出された赤池孝章先生が就任されました。

【お詫び】新体制調整の為、NLの発行が遅れたことをお詫び申し上げます。

◆◆◆新理事長 ご挨拶 ◆◆◆



理事長就任のご挨拶



理事長 赤池孝章
(東北大学大学院医学系研究科・教授)

この度、令和6年5月18日付けで、日本酸化ストレス学会の理事長を拝命しました。伝統ある日本酸化ストレス学会の理事長就任の榮譽と重責に身の震える思いがいたします。また、新執行体制においては、伊東 健(弘前大学)・内藤裕二(京都府立医科大学)・西田基宏(九州大学)・本橋ほづみ(東北大学)・李 昌一(神奈川歯科大学)の5名の新副理事長と共に日本酸化ストレス学会の舵取りに当たることとなりました。新理事・代議員の皆様のご支援、ご協力のもと、本学会の発展のために全力を尽くす所存です。

日本酸化ストレス学会は、2006年に吉川敏一理事長(当時)により、関連学協会が統合・改組されて以来、これを継承してきた小澤俊彦元理事長・豊田伸哉元理事長・内藤裕二前理事長の優れたリーダーシップにより多彩な進化を果たしました。例えば、2014年には、17th SFRR International (SFRR) Biennial Meetingを京都にて開催し、大きな成功を納めました。さらに、2018年の法人化以降は、登録会員数などの動向や会務・予算運営等の財政基盤も安定感を増して年次学術集会の開催などの学会運営は毎年順調に推進されています。また、内藤前理事長にあっては、学会機関誌であるJCBNの発刊・運営において大きな成果を収められ、2020年~2023年の4年間に及ぶ未曾有の新型コロナパンデミックによる世界の社会・経済情勢の低迷にもかかわらず、本学会は着実に発展して参りました。

先日、SFRR理事長のGiovanni E. Mann教授から届きました朗報をご紹介します。2027年の23rd SFRR Biennial Meetingを我が国(仙台)にて開催することが内定いたしました。これを受けて現在、執行部では、早速プログラム委員会を設置して、開催に向けた国内外の関係者や関連学術学協会との連携強化と準備体制の構築を開始いたしました。日本酸化ストレス学会の会員の皆様におかれても、前回(2014年・京都)のSFRR Biennial Meetingと同様に大きなご支援を賜りますようお願い申し上げます。近代のフリーラジカル医学生物学は、酸化ストレスを病態の枢軸と見なすだけでなく、むしろ生理的なストレスシグナル応答として捉えることで革新的な展開を成し遂げました。すなわち、その学術の巨大な系譜は、Redox Biology(レドックス生物学)という新しい学術変革領域として急速に進展しています。ご周知の通り、日本酸化ストレス学会(SFRR Japan)は、SFRRおよび SFRR Asiaの傘下・下部組織として運営されています。近年のRedox Biology研究の潮流の勢いは、SFRR下部組織・米国SFRRMや欧州

SFRR-Eの機関誌である、Redox BiologyやFree Radical Biology & Medicineなどが、直近数年で極めて高いステータス(IF)を獲得していることから実感することができます。注目すべきは、これらハイインパクトジャーナルのEditorial Boardに、沢山の本学会役員と会員が名を連ねていることです。このことは、日本の学術研究の質の高さを反映するだけでなく、本学会(SFRR Japan)が、国際的に先導的な役割を演じていることを示しています。そこで、日本酸化ストレス学会の世界レベルの高い学術性と研究力を基盤にして、レドックス生命科学分野の基礎と医学・臨床研究における最先端の研究成果を、国内外のアカデミアに広く提供することで、異分野・多分野への波及効果を目指した学術交流活動を精力的に推進します。例えば、学際的な学会運営の強化に向けて、関連学協会、特に1998年ノーベル医学・生理学賞の対象となったNO研究を、本学会に糾合するため、日本NO学会を改組・再編し、新興領域であるレドックスシグナル研究をさらに活性化いたします。当該組織改革により、本学会の多様な学術活動の裾野を広げることで、日本酸化ストレス学会のさらなる発展と深化・活性化を図る所存です。

これまでの歴代理事長と執行部により鋭意推進されてきた学会運営を継承し、今後なお一層の革新的な学会運営に取組むことにより、日本酸化ストレス学会のみならず、世界のレドックス生命科学の加速度的な発展に大きく貢献すべく最大限の努力をいたしますので、会員の皆様のご理解、ご支援、ご指導をいただきますようお願い申し上げます。

◆ 前理事長 ご挨拶 ◆

会員の皆様へ



前理事長 内藤 裕二
(京都府立医科大学学生体免疫栄養学講座教授)

このたび、4年間の任期を終え、日本酸化ストレス学会の理事長を退任することとなりました。これまで皆様からの温かいご支援とご協力に深く感謝申し上げます。学会の発展と酸化ストレス研究の推進において、皆様と共に多くの成果を挙げられたことは、私にとって大きな喜びであり誇りです。また、「酸化ストレスの医学」の改訂版を会員の皆さんの協力のもと本年度の学術集会に間に合わせる事ができたことも大きな喜びであります。4年間の任期中は新型コロナウイルスの影響もあり、十分な交流ができたとは思っていませんが、若手研究者の育成や国際的な連携の強化において、皆様のご協力があったこそ実現できたことを強調したいと思います。今後も酸化ストレス研究のさらなる発展を期待し、皆様のますますのご活躍を心からお祈り申し上げます。

改めまして、心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

◆ 若手奨励賞応募の際のご注意 ◆

◆◆◆ 学術奨励賞応募について ◆◆◆

一般演題公募と同時に公募致します。

1) 酸化ストレス研究の進歩に寄与する顕著な研究を発表し、将来発展の期待される研究者に対し授与する。ただし、研究業績はその主要な部分が日本国内で行なわれたものに限る。

2) 当該年の4月1日において40歳以下で会員歴3年を有するものとする。ただし、女性にあっては前項の年齢制限を45歳以下とする。

学術奨励賞応募の際のご注意!

会員歴不足の為、応募取り下げとなるケースが多く見られます。上長・指導者は、若手奨励のために、早めのご入会をご留意下さい。

応募に際しては、**会員歴にご注意ください。(入会した年を1年目とする。)**
2024年応募の場合は、2022年もしくはそれ以前に入会している必要があります。(2022,2023,2024で3年)

◆◆◆ 関連国際学会YIA応募について ◆◆◆

酸化ストレス2年に一回開催されていますSFRR Asia 並びに SFRR Australasia and Japan(SFRR A+J)では若手奨励賞を授与しております。会員歴は問いませんので、発表の際には、是非ともご応募ください。詳細は、学会HPをご参照ください。今年は、両学会の開催年となっております。奮ってご応募ください。

～ 2024年度 各賞受賞者 喜びの声 ～

各選考委員会による厳正な審査を経て、理事会・代議員会の承認の下、下記受賞が決定いたしました。受賞者の皆様の今後の益々のご活躍を祈念いたします。



「2024年度 学会賞 を受賞して」

松井 裕史

(筑波大学医学医療系・講師)



2024年度日本酸化ストレス学会、学会賞に選出いただき誠にありがとうございます。20代後半に大学院に入学し、理化学研究所と浜松ホトニクスつくば研究所で研鑽しました。大学院入学以来36年にわたって現在まで研究を継続できたのは、その2か所で研究の面白さをとことん教えていただいたからだと思います。浜松ホトニクスの平野憲一所长代理、理化学研究所細胞開発銀行の大野忠雄主任研究員には本当に感謝しております。浜松ホトニクスつくば研究所では光生物学の基礎から応用までを教わりました。また理化学研究所細胞開発銀行ではラット胃粘膜由来正常細胞培養系RGM1と、そのがん様変異株RGK1を樹立しました。虚血再灌流ストレスを負荷すると急性胃粘膜病変が形成され、病変に伴ってボルフィリン蛍光が認められる、同様に酸化ストレスに曝露された細胞は自家蛍光を発する、というのが小職の学位でした。その時から今まで活性酸素とボルフィリンをテーマにぶれることなく研究継続できたのは上記同じゲノム由来のがんと正常細胞のペアが備わっていたことに加え、周囲の方々の支援のためのだと思っております。ボルフィリンの研究は実臨床でも消化器がんの光線力学療法という治療法のメカニズム解明に役立ちました。すなわち「がんが光る」機序の解明です。光線力学療法は光が届く表層のがんしか治療できませんでした。これを克服すべく3年前から窒素安定同位体 ^{15}N と陽子線の共鳴核反応によるがん細胞特異的治療法＝複合型陽子線力学療法開発に取り組み、徐々に成果が上がってきました。既にその薬剤群は特許査定されています。何とか現役の間にこの治療法を上市し、切らずに根治するがん治療法として普及させたい所存です。気が付くと還暦も過ぎ、学位を取って卒業された方的人数も20人に達しました。消化器内科のみならず、乳腺外科と脳神経外科の大学院生も小職の研究室で研究を続けています。まだまだ半分というつもりで体を鍛え知識を広め意気軒昂に研究を進めてゆきたいと思っています。

「2024年 学術賞 を受賞して」



平山 祐

(岐阜薬科大学薬化学研究室・准教授)



この度は栄誉ある日本酸化ストレス学会学術賞をいただき、大変光栄に存じます。内藤裕二理事長をはじめ、選考委員の先生、関係者の方々に厚く御礼申し上げます。これまでたくさんの方に支えられていることは承知しておりますが、本稿ではここに至るきっかけくださったお二人の先生への感謝をここで述べさせていただきます。まず一人目は永澤秀子先生(岐阜薬科大学名誉教授)です。私は博士研究員として留学時(Christopher J. Chang 教授、カリフォルニア州立大学バークレー校)、過酸化水素と銅(II)イオン蛍光プローブの開発をしていたものの、海外ということもあり本学会に関わってはおりませんでした。永澤秀子先生の研究室に助教として採用いただき、低酸素状態を検出する蛍光プローブ開発に従事し、その中で鉄(II)イオン蛍光プローブの開発に至りました。ご存知のとおり、鉄(II)イオンはフェントン反応の源で、酸化ストレスにおける重要化学種であることから、酸化ストレス学会に参加するのは当然の流れとなり、今日に至っております。着任当初は全く成果が出ず、苦しい時期があったのですが、永澤先生には長い目で温かく見守っていただき、叱咤激励いただいたことが今回の受賞につながったことと感じております。もう一人は豊國伸哉先生(名古屋大学医学系研究科)です。プローブ開発当時、鉄(II)イオン蛍光プローブにいち早く目をつけられ、豊國先生が長年研究されておられる過剰鉄発がんの系にご使用いただきました。その成果が起点となり多くの先生に使っていただけることとなりました。豊國先生は、これまで私の開発してきた蛍光プローブの世界一のヘビーユーザーであり、たくさん共同研究に参画させていただいたことは、今回の賞応募にあたって大きな後押しとなりました。この場をお借りいたしまして、永澤先生、豊國先生のお二人に深くお礼申し上げます。私は現在も新たなプローブ分子の開発に取り組んでおり、微力ながら皆様のご研究にお役に立てるような化学ツールの開発を目指し、日々研究を進めております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。

「2024年 学術賞 を受賞して」



安井 博宣

(北海道大学大学院獣医学研究院・准教授)



この度は、歴史ある日本酸化ストレス学会の学術賞を頂戴しまして、光栄に存じます。内藤裕二理事長、松浦達也選考委員会委員長をはじめ、選考に携わって頂いた先生方、また、お世話になりました多くの先生方に厚く御礼申し上げます。

私は2000年から北海道大学獣医学部にて、桑原幹典教授が主宰する放射線学教室に配属し、研究キャリアを開始しました。大学院後半からは稲波修教授のご指導のもと、ここまで放射線をはじめとする酸化ストレスに関係した研究を続けることができました。またその間、ポスドクとして留学したNIHでご指導いただいたMurali Krishana博士や、北海道大学アイソトープ総合センター久下裕司教授にもお世話になり、特に生体イメージングに関連する仕事で業績を残すことができ、大変感謝しております。

日本酸化ストレス学会には2011年学術大会から参加させていただいていますが、この年は東日本大震災の影響でルツリゾートに会場を変更して開催された大会でした。懇親会に合わせて上げられた花火は完全な濃霧によって全く形は分からないものの、音とぼんやりと明るく光ることでその存在が認識できる非常に心に残るものでした。この実体を見せないでまわりに影響を与える花火はまさに酸化ストレスのようであり、深層心理にその後のイメージングによってその挙動を捉える研究に自分を進ませたのかもしれない。また、専門とするがんの放射線生物学以外にも、スナネズミ虚血再灌流モデルやLECラット劇症肝炎モデルに対する抗酸化剤の効果を目で確認することでこの研究分野の重要性と面白さを感じています。今後この受賞を励みに、眼で見る酸化ストレス研究で健康になる方法を開発できるように尽力いたしますとともに、学会の発展に貢献できるよう後進の指導や若手の会のサポートに努力していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。

「2024年 八木記念学術奨励賞 を受賞して」



永瀬 翠(東京工科大学)



この度は名誉ある八木記念学術奨励賞をいただきましたこと大変光栄に存じます。日本酸化ストレス学会理事長の内藤裕二先生(選考当時)をはじめ、選考委員の先生方、関係者の皆様に御礼申し上げます。本論文では、in vitroにおいてリポフラビンがNADH存在下でコエンザイムQ10を化学的に還元することを明らかにし、生体内においても化学的に還元される可能性があることを報告いたしました。現在は育児のために研究からは離れておりますが、本受賞を励みに再び研究に関われるように精進して参りたいと思います。最後に、本研究の遂行にあたりご指導いただきました共著者の皆様に感謝申し上げます。

2024年度「功労賞」に下記2名の先生が選出されました。

河野 雅弘 先生(名誉会員)

(東京工業大学生命理工学院 蒲池研究室)

宮田 直樹 先生(名誉会員)

(名古屋市立大学 創薬基盤科学研究所 名誉教授)



～ High Citation Award ～

本学会オフィシャルジャーナルであるJournal of Clinical Biochemistry and Nutrition (JCBN)において、前年度第一著者として受理された論文の中で、引用が多く、IF向上の為に貢献のあった論文に授与するものです。2024年度は、下記の2件に授与されました。



2024年度受賞者: 以下2件

(1) 総説: 8件 in 2023 Tetsuro Kamiya (Copper in the tumor microenvironment and tumor metastasis, p22-28, Vol.71-1, 2022)

(2) 原著: 13件 in 2023 Yuki Kizawa, et al. (Effects of anthocyanin, astaxanthin, and lutein on eye functions: a randomized, double-blind, placebo-controlled study: p77-90, Vol.69-1, 2021)



「2024年 学術奨励賞を受賞して」
 ★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★
伊藤 紘
 (国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構
 量子生命科学研究所)

この度は日本酸化ストレス学会学術奨励賞を授与いただき大変光栄に存じます。理事長の内藤裕二先生、大会長の李昌一先生、選考委員の先生方並びに本学会の先生方に深く感謝申し上げます。また、日頃よりご指導いただいております中西郁夫先生、松本謙一郎先生、福原潔先生、松井裕史先生に厚く御礼申し上げます。私は学生の頃から本学会に身を置かせていただき、生物学、医学、化学と様々なご専門を持つユニークな先生方のお話を拝聴する機会に恵まれてきました。今回の受賞を励みに益々勉強させていただければと思いますので、今後ともご指導の程、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



「2024年 学術奨励賞を受賞して」
 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
甲田優太
 (筑波大学数理物質系)

この度は、栄誉ある日本酸化ストレス学会学術奨励賞を頂き、大変光栄に存じます。内藤裕二理事長、および選考に携わって頂いた先生方に厚く御礼申し上げます。この場をお借りしてお世話になった先生方、共同研究者の先生方にも心より厚く御礼申し上げます。高分子化学における精密重合で学位を取得した私は、異分野から参入して本学会、酸化ストレス学の奥深さに驚嘆する日々です。引き続き邁進して参りますので、御指導、御鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

◇◇◇ 次期年次学術集会案内 ◇◇◇

第78回日本酸化ストレス学会学術集会



会 期:2025年5月22日(木)～24日(土)
 会 場:ミナカ小田原コンベンションホール・
 ホテル天成園 小田原駅別館
<https://www.minaka-odawara.jp/>
 会 長:鈴木秀和
 (東海大学医学部医学科内科学系消化器内科学教授)

この度、第50回日本微小循環学会総会と第78回日本酸化ストレス学会学術集会を合同で、2025年5月22日(木)～24日(土)の3日間、小田原駅直結のミナカ小田原コンベンションホールで開催させて頂くことになりました。

両学会とも、生命の要めであり、疾患発生の場(生体反応の場)となる臓器微小循環床、そして、当該部位での血管性・炎症性・腫瘍性・機能的病変での酸化ストレス・酸素代謝の生理病態、さらには治療を扱う基礎研究・トランスレーショナル研究の要の学会として、今後益々発展が期待される領域を担っており、病態・診断・治療・予防の理解を深め、それらの知識を広く普及させるための生命科学・医学の研究・教育を充実させるとともに、科学技術の粋を生かして、より有効な解析法を模索し、人類の生活の質の向上や疾患治療薬開発の推進の責務も担っております。また、これまでの両学会の歴史的経緯を鑑みても、両学会は、その時代の科学の進歩と新たな領域の取り込みには極めて柔軟であり、今回、縁あって同時開催することで、さらなるシーズを創生することが期待されます。

今回は、両学会の共通のテーマとして「微小循環と酸化ストレスから生命科学を紐解く」を掲げましたが、広い新たな視点でのシンポジウムやワークショップ、一般講演等、様々なプログラムを企画しております。会員一同、勤労・勤勉のモデルでもある二宮金次郎ゆかりの地、小田原に集い、50回、78回を迎える両学会のルーツを思い起こしつつ、現在までに見出された酸化ストレス学や微小循環学の知見を踏まえうえて、最新の研究成果を熱く語りあい、一日も早く人類に還元するよう、さらに発展させたいと考えております。これまでの酸化ストレス学・微小循環学を受け継ぎ、多くの会員の方々に独自の学術的見地から新しい知見をご報告して頂き、活発な討論が展開されますように、微力ながら準備を進めて参ります。より多くの皆様にご参加いただきますよう何卒よろしくお願ひ申し上げます。



第77回日本酸化ストレス学会学術集会



会 期:2024年5月17日(金)～19日(日)
 会 場:神奈川県川崎市(横浜賀子稲岡町82)
 会 長:李 昌一(神奈川県川崎市 社会歯科学系
 健康科学講座災害歯科学分野 教授)

第77回日本酸化ストレス学会・第23回日本NO学会合同学術集会(大会長防衛医科大学校足立健教授)が2024年5月17日～19日の3日間、神奈川県川崎市で開催されました。テーマは「人生100年時代をともに生きる～健康長寿を実現する 酸化ストレス研究の今と未来～ NO研究の波及～」とし、日本だけではなく、グローバルにおいても広く提唱されている人生100年時代の生物医学研究の鍵となる酸化ストレス、NO研究、硫黄関連分子の内外の最先端生物医学研究者が集う学術集会となりました。両学会会員を併せて、250名の参加登録をいただき、招待者を含めて300人以上のご参加をいただきました。今回の日本酸化ストレス学会・日本NO学会合同学術集会の目玉となるレドックス、酸化ストレス、NO、硫黄関連分子領域を専門とする著名な講演者による「若手、初心者のための合同教育講演」の5講演、特別講演としては柿澤昌先生(京都健康長寿医療センター研究所)「NOとROSのクロストークによる記憶学習制御」、赤池孝章教授(東北大学大学院)「レドックス生命科学の国際先導研究:超硫黄の巨大潮流」の2講演、そして5テーマの酸化ストレス・NO研究関連シンポジウムと「Supersulfides as new fundamental biomolecules for life」というテーマで、国際シンポジウムが開催されました。さらに、日本酸化ストレス学会学術賞、学術賞受賞講演も例年通り行われ、一般口演、ポスターについても併せて120を超える演題となり、基礎から臨床まで非常に幅広い領域から発表が行われ、初めての3日間の開催でありましたが、各会場で多数の発表者によって熱心で活発な意見交換や討論が繰り広げられました。学術集会を通じて、酸化ストレス・NO・硫黄関連分子研究のレドックスバイオロジーが生命科学の重要な領域であることを参加者の皆様に発信していただき、無事に終了することができました。これも一重にご参加いただきました講演者、参加者はもちろんのこと、学術集会を支えてくださいました協賛企業、学会事務局を含めた企画関係者、全ての方々に感謝申し上げます。報告とさせていただきます。



2023年度学会賞・学術賞 受賞記念講演
 第77回年次学術集会にて対面にて行われました。
 おめでとうございます。



学会賞(鈴木秀和)



学術賞(岡崎泰昌)



学会賞(谷戸正樹)

第77回日本酸化ストレス学会学術集会における
 若手シンポジウム・フリーラジカルスクール2024について
 ～若手の会活動報告～



神谷 哲朗 (岐阜薬科大学)

第77回日本酸化ストレス学会学術集会(2024年5月17日～19日)において、若手の会主催シンポジウムを開催いたしました。「人生100年時代をともに生きる」をテーマとした学術集会のトップバッターとして、老化研究における基礎から応用、今後の展望に至るまで幅広く議論することができました。ご講演いただきました近藤嘉高先生(東京都健康長寿医療センター研究所)、殿城亜矢子先生(千葉大学)、早野元詞先生(慶應義塾大学)に改めて御礼申し上げます。

今夏(2024年8月7日、8日)には、岐阜市にある長良川温泉で「フリーラジカルスクール2024」を開催し、大変熱い議論で盛り上がりました。今後も学術集会でのシンポジウム、フリーラジカルスクールを通して、酸化ストレス研究の発展に貢献していきます。若手の会にご興味のある方は事務局までご連絡ください(mail: yfr.since2020@gmail.com、HP: <https://yfrsince2020.wixsite.com/my-site>)。

◇◇◇ 関連学会 開催案内 ◇◇◇

以下の関連学会情報は予定を多く含みます。変更などが生じる可能性もありますので、詳細については、各主催団体にお問い合わせ下さい。また、学会HPにても随時情報を掲載予定です。

日本酸化ストレス学会 東海支部 第13回学術集会

日時: 2025年2月8日(土)13:00~

会場: 名古屋大学 野依記念学術交流館 野依ホール
(愛知県名古屋市中種区不老町)

共同実行委員長: 田中宏昌(名古屋大学工学研究科)

柴田貴広(名古屋大学生命農学研究科)



日本酸化ストレス学会 関東支部 第37回学術集会

日時: 2024年11月15日(金)

会場: 昭和大学 上條記念館

会長: 板部洋之(昭和大学薬学部基礎薬学講座生物化学部門)

問い合わせ: Email: 37-sfrjkb@pharm.showa-u.ac.jp

関東支部HP: <https://sfrj-kanto.blog.jp/>



JCBN(学会オフィシャルジャーナル)情報 (Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition)

オンラインによる投稿随時受付中!

<http://www.editorialmanager.com/jcbn/>

IF: 2.4 2022 Journal Impact Factor (JIF)
頁チャージは会員特別割引価格を設定しています。

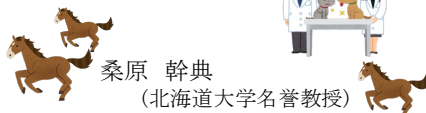
Editorial Secretariat for JCBN: jcbn@nacos.com



新 シリーズ:酸化ストレスの轟き 第11回



獣医学研究者への期待

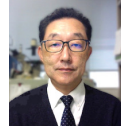


昭和44年(1969年)私は北海道大学大学院理学研究科博士課程を中退し、同大学獣医学部に新設された獣医放射線講座に助手として採用して頂きました。教授の専門分野が放射線生物学でしたので、その研究に従事することになりました。放射線の生物作用は、放射線エネルギーの吸収→H₂O分解にともなうOHラジカル生成→OHラジカルによる核内DNAの酸化的損傷生成(塩基損傷、鎖切断等)から始まりますので、私の研究テーマはOHラジカルによるDNA損傷誘発のメカニズムをESRで解析することでした。研究内容が活性酸素、DNA損傷、ESRということでしたので、以降、磁気共鳴医学会やSFRR Japanなどの学会で発表させて頂く機会を得ることができました。ただ、私は獣医学部に所属していたので、ESRや活性酸素の知識を獣医学研究に役立てられないか考えました。幸い、酪農学園大学永幡肇教授が牛白血球粘着不全症(BLAD)ホルスタインを研究されていたので、その牛の好中球のスーパーオキシド生成能を測定させて頂くことができました。さらに、北大獣医学部附属動物病院に玉ねぎ中毒を発症した犬が運ばれ獣医内科学教室で研究が行われていたので、それに参加し、イオウ化合物による赤血球膜の酸化的障害など原因究明に貢献することができました。獣医学部には競走馬が好きな学生がいます。そこで、社台スタリオンステーションの獣医師の方にサラブレッド種牡馬の血清を採取してもらい、抗酸化機能に関する成分などの分析を行わせました。この血清にはG1レースで活躍した有名な馬のものが含まれていたのが学生には大変喜ばれました。このように、何とか頑張って参りましたが、現在、伴侶動物(犬、猫)では獣医療の進展にともない高齢化が進み、人間と同様視力、聴力の低下、歯の劣化、発がん、脳神経萎縮など酸化ストレスが主たる原因とみられる疾患が増加しています。今まさに獣医学研究者の出番だと思えます。ぜひ酸化ストレス学会で動物医療での研究成果を発表して頂きたいと願っているところです。



◇ 今後の学術集会 ◇

第79回日本酸化ストレス学会学術集会



会期: 2026年6月18日(木)~19日(金)

会場: 岡谷鋼機名古屋公会堂(名古屋市公会堂)

会長: 中川 秀彦

(名古屋市立大学大学院薬学研究所 教授)

酸化ストレス研究にゆかりの深い名古屋の地で、第79回学術集会を開催させていただくこととなりました。名古屋駅からは少し距離がありますが、繁華街から交通の便がよい鶴舞公園内の歴史ある会場で開催する予定です。詳細については後日お知らせいたしますが、ぜひご発表ご参加をご予定ください。皆様からの多くのご演題・ご参加をお待ちしております。

◇ SFRR International & Asia News ◇

SFRR Asia

次回 SFRR Asia Biennial Meeting

The 11th Biennial Meeting of Society for Free Radical Research-Asia (SFRR-Asia)

会期: 2024年10月21日~24日

会場: Kuntai Hotel 北京・中国

会長: Chang Chen 担当: SFRR China



SFRR Australasia and Japan

次回 SFRR A+J Biennial Meeting

11th Joint Biennial Meeting of Society for Free Radical Research Australasia and Japan (SFRR A+J 2024)

会期: 2024年12月9日~11日

会場: Finkel Lecture Theatre, John Curtin School of Medical Research, Canberra, オーストラリア



いずれも若手奨励賞(YIA)を募集しています。(Asiaは締切済)

多数のご参加を期待しております。なお、中国入国にはVISAが必要です。申請に必要な招聘状は中国事務局が発行してくれます。

*連絡先: SFRRAsia2024 <sfr-secretariat@bsc.org.cn>

SFRR Japan(日本酸化ストレス学会)は、SFRR International並びにSFRR Asiaの下部組織です。日本酸化ストレス学会の会員の方は自動的に両国際組織のメンバーとなっております。

◇◇◇ 事務局より ◇◇◇

2019年12月に感染報告がされてから、わずか数カ月程の間にパンデミックと言われる世界的な流行となったCOVID-19も、withコロナの時代を迎え、日常生活が徐々に取り戻され、世界的に人流が急激に活発となってきました。事務局のある京都は多くの海外からの旅行者が押し寄せて、今やオーバーツーリズムに悩まされる日々。コロナ禍を考えれば、人々が笑顔で旅行が出来るというのは幸せなことだと思いつつ、満員バスに揺られています。対面の学会活動も日常となり、昨年の神戸に続き、横須賀での年次学術集会では、熱気溢れる発表や討論が行われ、参加者の皆様の嬉々とした様子を嬉しく拝見しておりました。今年は、SFRR AsiaやSFRR A+Jなど国際学会も通常運転の現地開催となります。是非とも、会員の皆様におかれましては、国際交流を今一度楽しんで頂けたらと思います。定款の改訂など調整に時間がかかり、NLの発行が遅れたことをご詫言申し上げます。

掲載希望の記事などございましたら、編集事務局宛ご連絡をお願いします。NL問合せ/連絡先: sfrj@koto.kpu-m.ac.jp

SFRR Newsletter 2024年6月号

発行: 2024年9月15日

一般社団法人日本酸化ストレス学会事務局

(総務委員会: 半田 修・犬童寛子・中西郁夫)

法人事務局: 〒602-8048

京都市上京区下立売通小川東入西大路町146番地 中西印刷(株)内

Tel: 075-415-3661 Fax: 075-415-3662

内容に関するお問い合わせ: E-mail: sfrj@koto.kpu-m.ac.jp

HP: <http://sfrj.umin.jp/>